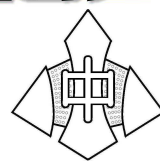


手をたずさえて

“小原田PRIDE”～自信と誇り

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒



令和3年9月16日（木）発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋

「いのちを見つめる日」の感想です 防災講話から

9月10日（金）5校時には避難訓練が行われました。今回は避難行動は行わず、ZOOMによる防災講話を行いました。校長室から各教室への情報発信でした。機器接続の不具合がありましたが、予定する内容は終えることができました。

今回は「震災体験から学んだこと」ということで、東日本大震災で大きな被害を受け、そこから復興を遂げたかつての私の勤務校の話をしました。震災当時の数多くの写真を映し出すとともに、当時の生徒作文（学校だよりNo.24に掲載）を3年鈴木遼介君と木原碧仁君に朗読してもらいました。「いのちを見つめる日」という位置付けで実施しました。No.25とNo.26では、生徒の感想を紹介します。



今まで避難訓練は形だけで、本当に災害が起こったらなど考えていませんでした。しかし、今回の防災講話では、震災当時の壁がひび割れていたり、窓ガラスがはげたりしているぼろぼろの校舎を見て、私はもし今、震災が来たら、逃げ遅れていたと思います。そうすると命にかかわるので、校長先生のお話をもとに、「心の準備」「ものの準備」「連絡の準備」をしっかりと、「避難訓練＝いのちを見つめる日」を心に留めて生活したいと思いました。最後に、私は震災当時2歳でよく覚えていなかったけれど、私ができることはたくさんあると思うので、今回の防災講話を生かして生活したいです。（1年 小室 碧）

改めて地震、火災、水害の怖さを知った。私も永盛小学校出身で、水害の怖さ、つらさは分かっていたけど、本宮二中の人達も同じつらい思いをしていたのだと思った。これからも何が起こるか分からないので、自分のできることはやりたいと思った。そして、本当に突然起こることなので、その時は落ち着いて避難したいと思う。今日、家に帰ったら、今日学んだことを家族に伝え、ものの準備をしたり、心の準備を個人でするとともに、家族と連絡の準備など確認しておきたい。（1年 佐藤悠希）

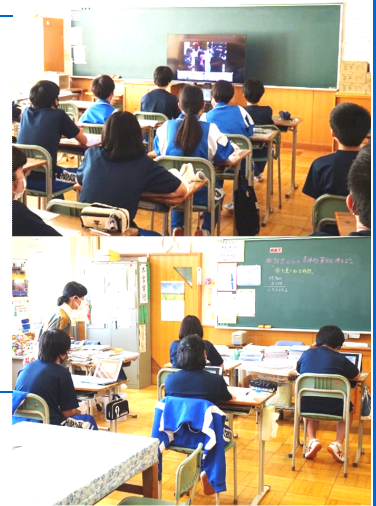
災害から学ぶことは、当たり前前の生活のありがたさ、人と人との助け合いの大切さだと感じる。震災を体験した人は、日々の生活に戻りたいと強く願ったと思う。そんな被災者を支えたのは、ボランティアや応援のメッセージだと思う。災害で大切なのは、前もった準備もそうだが、助け合いの精神も必要だ。今回の講話で、僕は今当たり前前に生きていることに感謝し、困った人は助けるという“助け合い”を大切にしていこうと思った。（1年 村上天介）

私は今日の防災講話で、震災の恐ろしさと普段から防災意識を高めておくことの大切さを改めて感じました。本宮二中生の作文や被害を受けた校舎の写真からは、被災者の苦労や不便な生活をしてきたことがよく伝わってきました。特に作文からは、いつどこで発生するか分からない地震によって日常が奪われる恐怖を強く感じました。なので、これらの被害を少しでも抑えるためには、日頃の避難訓練などの備えがとても重要になるのだと思いました。そして、今はコロナ渦で避難生活も過酷なものになると思うので、災害を他人事と考えず、人との協力もしっかりできるよう準備しておきたいと思いました。（2年 池本侑未）

私はこの講話を聞いて、私の「普通の生活」というものは、災害によって一瞬で消されてしまうこと、その「普通」を取り戻すには、たくさんの時間と労力が必要になることを改めて感じました。また、この講話を通して、「自分にできる防災は何なのか」を考え、行動に移そうと思えるきっかけになりました。これからも、防災について深く考え、災害が起きたときに備えていきたいと思いました。（2年 江川実優）

今回の防災講話で心に残ったことは、「東日本大震災のことを風化させないようにする」という言葉でした。もともと私たちは何の目的で避難訓練をしているのか、どのようにして訓練に取り組めばよいのか、それらが薄れているような気がしていました。それが今回、防災講話があったため、過去の被害がこんなにも大きかったこと、同じ中学生の心情や生活の変化、日々の日常が大切なことなど、たくさんのことを知ることができました。防災講話を通して、私たちが思い出さなければいけないことやこれからに生かしていかなければいけないことが、一人一人見つけれられたのではないかと思います。東日本大震災のことを頭の片隅にしまっておいて、忘れることのなく、日々の生活の糧としてこの先より詳しく考えていけたらいいと感じました。(2年 松崎 結)

今回の話を聞いて、改めて防災意識を高めようと思った。話には地震の恐ろしさはもちろん、いつ来るかわからないという恐ろしさも込められたいた。実際の写真も添えられていて、こんなことが現実にかかるのかと思うと、恐怖で頭がいっぱいになった。しかし、恐怖しているだけではだめだということも、この話を聞いて思った。写真のような惨事に備えるため、家で食料や水などが入ったバックを作ったり、家庭内の防災意識を高めたり、近所の人や親せき、友達などにも防災意識を広めていきたい。また、自分が住んでいる所以外でこうした災害が起こったら、積極的にボランティアなどに参加し、悲しい思いをする人を少なくするためにも、自分にできることを一つでも多くしていきたい。(3年 天野 貞)



こんなに近くでも大きな被害が出ていたことを初めて知った。当時自分は5歳くらいで、机に隠れて祖父母の家に避難した。自分の家も浸水して大変だったが、本宮二中の被害を見て、改めて災害の力の強さ、恐ろしさを知った。普段は何も変わらない自然だが、時に牙をむいて人の命・暮らし・家族さえもバラバラにしてしまう。この被害をおさえるためには、自分たちの日々の意識が重要になる。当たり前のことを当たり前で終わらせて目を背け続けると、悲惨な結果になるだろう。国語の授業で原爆の詩『挨拶』を習った。その詩には自分の身の周りで起こりえる危機は自分で判断し、行動すべきだという警告が表現されている。これは今の自分達にも言えることだ。あの日の教訓や恐怖を忘れ、風化させるのではなく、あの日がまた来るのに備えるために、訓練や災害に役立つ知識を持つべきだ。語り継ぎ、一人でも多くの命を救うために、まず自分達が先導となり行動していきたい。(3年 伊藤由衣)

今回の講話を聞いて、「僕たちは弛(たる)んでいる」と感じた。僕たちは震災を経験したが、大半の生徒が記録に残っておらず、残っている人も曖昧なものになっている。そのため、あのときの惨状を画像や映像でしか知ることができない。しかし、僕たちは実際に被害を受けた人の作文を読んだ。普通の暮らしをしていた人たちが一瞬で全てを奪われた。友と遊び遊んだ校舎、部活を行うのに必須だったグラウンド、それだけに足らず、数え切れない被害があったのだ。今や僕たちは震災を「あったこと」にしか感じていないだろう。だから、「僕たちは弛んでいる」と感じた。それではダメなのだ。今後、震災のみならず、災害に対しての意識を変える必要があると思う。みんな、災害の恐ろしさを改めて考え直してほしい。(3年 渡辺 陸)



私は、防災講話を受けて、改めて災害の危険性を実感しました。私にとって東日本大震災は10年前の話なので、あまりはっきり覚えてはいませんが、「怖い」という感情は今もしっかりと心に残っています。あのような災害は今後いつ起こるか分かりません。そのために、今自分ができる備えをしっかり考えるべきだと思いました。東日本大震災は本当に予測不可能なトラブルがたくさん起きて、亡くなった人もたくさんいました。災害は予測することができないけど、災害の被害を少なくするために備えることなら、今できると思います。自分のためにも、家族のためにも、「今、できること」をしっかりやろうと思います。(3年 夏井明日菜)

防災講話を聞いて、今私達はコロナウイルスが流行していて、普通の生活が送れていません。ですが、10年前のことを考えると、今の生活はまだ幸せだと思います。学校に来ることも難しい、友達に会えない部活ができないなどが続いているわけではありません。友達と楽しく過ごせている今、どれだけ幸せなことなのか。もう一度しっかり考えてみようと思える良い機会になりました。これからの生活でもいつ同じことが起こるかも分かりません。自分達にできることは何かをしっかり考えていけるようにしたいと思います。(3年 上野彩美)